

## ●第3部 事例紹介

### ①長野県

長野県の道路アダプト・プログラムは、10月1日現在で235団体、予算額3,000万円で行なっています。他に河川アダプトプログラムがあり、諏訪湖・上川アダプト等、河川のアダプト・プログラムには107団体が関わっています。

長野県は企業によるアダプトが少ないのですが、自治会・環境団体が多く関わっています。他方、諏訪湖アダプトは、諏訪湖の外周32区間で環境意識の高い企業も入って取り組んでいます。

道路アダプト・プログラムは、県が管理する道路において建設事務所・里親・市町村の三者協定を締結し、県が支援し、市町村が協力、里親がボランティアを行なうことで、道路環境の向上と地域住民の交流促進を図るものとなっています。

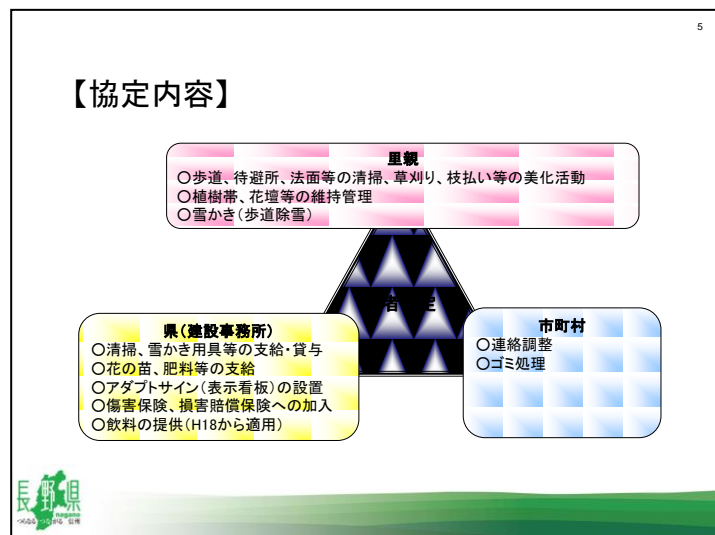
平成12年6月にアダプトシステム試行実施要領を定め、試行開始しました。既に先行実施していた他県例などを参考に、担当課内の議論で試行を始めました。協働という観点も

ありましたが、一方で道路維持管理の予算がだいぶ絞られてきたこともあり、何とか効率的に地域住民の力をお借りしながら管理をしていきたいと、試行を始めたということです。

里親は公募するわけではなく、建設事務所、各地域の現地機関が里親にふさわしい団体を選定して、協定を締結する形態を採っていました。従来から頻繁にボランティアで道路美化活動などを行っている住民団体や個人・企業、それから、地域貢献に意欲のある企業・団体など、主に既存の道路愛護団体を対象に、選定していきました。活動は月1回程度を目安とし、協定期間1年で更新制を採りました。

試行を開始してから数が増え、平成15年8月から正式な実施要領を定めて本格実施に移行しました。本格実施からは、公募によって里親申込書を提出していただき、協定を締結する形になりました。活動回数も月1回ではハードルが高いということで、年6回を目安としています。協定期間は定めず、解除したいと申し出るまでは継続する形を採っています。

平成16年8月から10月に掛けて一部のアダプト団体との意見交換会を行い、その後の制度拡充の参考にしました。平成18年11月には5か年計画を策定し、協定団体数、活動延長の拡大を図ってきました。



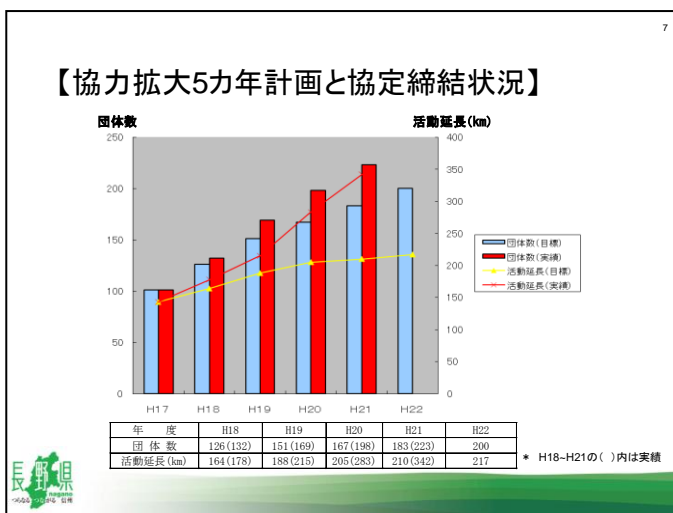
協定は三者協定ですが、里親は美化活動を行う。歩道・法面等の草刈り・清掃等、雪かきも項目に挙げています。それから県は、必要な清掃用具の貸与や、花の苗・肥料等の支給、そしてアダプトサインの設置、傷害保険や損害保険加入を行なっています。また、平成18年からは飲料水の提供も行なっています。市町村は里親と県の連絡調整をしたり、集まったごみ処理に協力することになっています。

アダプトシステム協力拡大5か年計画は、地域と行政の協働として「信州の美しい道づくり日本一へ」という目標を立てて推進してきました。アダプトでやったことで、計画初年度の18年度で9,000万円程度の経費が削減出来たという試算をしています。平成21年度末は、協定団体数223、活動延長342kmと、計画を大幅に上回る進捗状況になっています。

ごみ捨て防止効果、住民の主体的な参

加による愛護意識の高揚、道路環境の向上、地域住民の交流促進といった効果も挙げられています。また、こういった活動が継続することにより、地域を担うリーダー育成が図れるという効果も挙げられます。活動後には、事業評価シートによって自己評価を実施しています。

今後の課題は、表彰制度を拡充することによって参加意欲が継続するように支援していくこと、平成23年度からの新しい5か年計画をどう作成していくかということです。それから、「さわやかにもてなそう」県民運動とのタイアップで、観光地を中心とした沿道の美化活動もしていきたいと考えています。



## ②岡山市

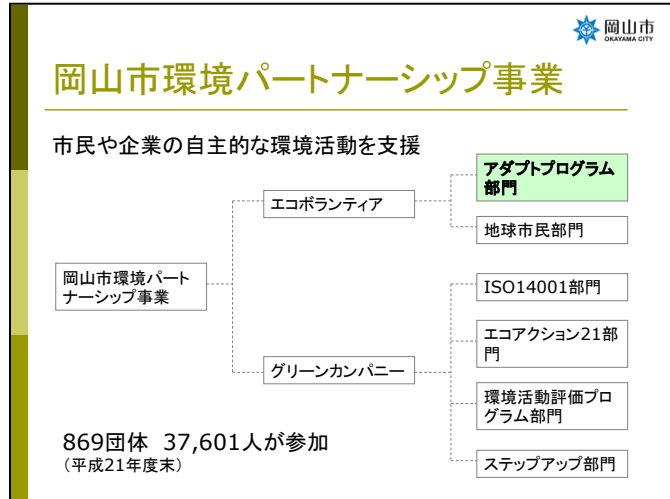
岡山市のアダプトは、環境パートナーシップ事業の一部門です。このパートナーシップ事業というのは、市民や事業者の自主的な環境づくり活動が、全市民的な広がりを持つ仕組みとして、こういった登録制度を設けています。パートナーシップは大きく二つに分かれています。一つは、地域の環境美化活動などを中心に行うエコボランティア。もう一つは、企業などが自社の環境負荷低減活動を行うグリーンカンパニーです。

更にエコボランティアは、いわゆるアダプトの他に地球市民部門といたしまして、特定の地域にかかわらず環境学習の活動やリサイクルの活動を行うようなものを位置付けています。平成21年度末、869団体、3万7,600人強が参加しています。

平成13年4月から始まり、この年度末でちょうど10年になります。交流会、あるいは情報誌の発行、表彰・顕彰などの支援を行うことで、どちらかという孤立しがちな活動団体間の緩やかな連携、あるいは情報の共有化などを図ることによって、それぞれの活動レベルの向上、あるいは環境づくり活動の輪の全市民的な拡大というものを目指しています。この位置付け根拠ですが、一つは環境保全条例があります。市民等の自発的な活動の促進を促すということで、これを具体化したものが本事業です。更に環境基本計画では、環境パートナーシップ構築プロジェクトというものを設けて、これを推進しています。更には最近作った都市ビジョンでは、環境先進都市プロジェクトというのを挙げまして、それにこのパートナーシップ事業の参加数が数値目標として挙げられています。

次にアダプト・プログラムの概要です。我々は環境保全部門が導入していますので、実質的な環境づくり活動の拡大と活動レベルの向上。あるいはアダプトをきっかけにさまざまな他の環境問題にも関心を持ち、行動出来る人を育成していこうというのが目的です。参加対象は市民団体、個人でも可、あるいは企業などです。導入場所は道路・河川・公園など、公に開かれた場所ならどこでもいいです。国・市・県といった管理者は問いません。内容は、清掃・除草・緑化・落書き消去・野生生物保護など多岐にわたります。活動期間は、最低1年以上5年未満で更新可、年3回以上活動をしていただいています。参加はいつでも出来、ごみの処理については、市が取りに行くのではなく、最寄りのごみステーションに分別して決められた日に出していただく形を採っています。

市の支援内容ですが、メインは清掃資材の貸与です。落書き消去の場合は、ペンキ・はけ等一



式全部お貸しします。それからのぼりを作って提供しています。あとは保険・交流会・ニュースレターといったことがあります。

活動の手順は、他のアダプトとあまり変わりません。活動内容を決定する際に、単なる清掃活動だけであれば、その場所が国・県の場所であっても、いちいちお伺いは立てていません。連絡もせずに始めています。ただ、植樹とか花壇の手入れとか、その場所を改変する場合は管理者と調整してもらっています。落書き消去の場合は、もちろん消去場所の所有者に了解を取った上でやってくださっています。

次に、参加団体数と人数です。岡山市では国・県アダプトに参加しているものを市のアダプト参加と見なすという、見なし協定みたいなものを結んでいまして、それらも全部カウントして334団体、1万4,700強となっています。県のアダプトは、建設部管理課というところがやっているのですが、国ボランティアロードは国交省ですし、そういった環境部門以外のところがやっているアダプトについても、岡山市の担当窓口は全部環境保全課ということでやっています。

分野別では、河川・港湾が193団体と一番多く、このほとんど県の河川アダプトです。食環境さんの分け方に倣い構成別で見ますと、一番多いのは町内会・自治会、そしてボランティア団体、3番目が企業となっています。

導入の経緯ですが、平成13年4月に環境保全条例を制定するというので、それを具体化する策としてアダプトをしようと環境保全部門で考えていました。一方で土木管理部門でも市道へのアダプトの導入を検討していました。これを市長から、窓口が複数あつては市民が困るだろうという指摘を受けて、全部環境保全課がやることになりました。

ユニークな特徴としては、まず活動場所をあまり厳密に決めない点があります。岡山駅周辺とか〇〇地内というような場合もあります。また、岡山駅周辺では、三つ四つの団体がいっぺんにやっていることもよくあります。それから、個人でも参加出来ますし、市外の方でも市内でやっていただけるなら参加可です。また、国・県のアダプトを市のアダプト参加と見なすということで、国・県との協定書の中にその旨を入れています。市のアダプトが一番緩やかなルールなので、国・県のアダプトは、市のアダプトの要件を満たすものとなっています。

## ユニークな特徴

- ・活動場所ゆるやか  
岡山駅周辺、〇〇地内など
  - ・個人参加可、市外からも参加可
  - ・みなし協定  
国、県のアダプト参加を市のアダプト参加とみなす
- 「活動団体が行う活動は、市町が別に定める「環境パートナーシップ事業実施要領」に規定するアダプト・プログラム部門の要件を満たすものとする。」

活動紹介ですが、写真は平田東町内会の例です。必ず1世帯が年に1回参加するような仕組みを作っていますので、この公園はとても綺麗です。また年に1回は全世帯が参加して三世代

合同清掃が行なわれていて、この公園は自分たちの公園だと。あるいは、自分たちの交流の場だと思っているという、アダプトの鏡のような団体です。

次に落書きの消去活動をしているパトロール隊で、子どもたちも消すのは楽しいと言って一緒にやっています。

次に Culture という面白い団体を紹介します。20代、30代の若者グループなのですが、代表の方は市外在住で岡山市内に通勤しています。通勤途中にいつも見掛ける場所があまりにもごみが多いということで、最初は1人でごみ拾いをしていたそうです。綺麗になるのは嬉しいけれど、1人ではちょっと恥ずかしいということで、友達などに声を掛けてやり始めました。ごみ拾いを文化にしたいと、Culture という名前を付けています。活動に参加している仲間たちは今どきの若者なのですが、日頃からレジ袋をもらわないとか、車のアクセルを控えようとか、非常に環境意識が高いという特徴があります。市から地元町内会にも声を掛けると、若い子たちが自分の町内に来て清掃をしてくれているんだから、自分たちもやらなければと清掃活動を通じた交流が始まっています。

次は自然保護の事例で、蛍や滝を守る活動をしています。シーズンに見に来てくれる人がいつも綺麗ですねと声を掛けてくれるのが、一番の励みになっているということです。

続いて企業の例です。あいおいニッセイ同和損保は、後楽園のすぐ横にある相生橋を掃除しています。隣のリコー中国は、月初めの第1営業日を周辺美化活動の日と定めて活動しています。庭園岡山エコクリーナーズは、岡山駅の駅ビルや地下街のおおぜいの方々が集まって駅周辺の合同清掃をやっています。アース・ミュージック・アンド・エコロジーという、宮崎あおいさんがCMをやっているクロスカンパニーという企業が声を掛けて始まりました。社長は39歳と若いのですが、若い者がごみをすて、高齢者が拾うというのはおかしいということで、こういった活動を始めました。今600名ぐらいが参加しています。その右は、旭川を綺麗にしようと頑張っているNPOです。



## 交流会

---



- ・年1回、毎年2月頃開催
- ・事例紹介、パネルセッションなど
- ・近年はESD活動団体と合同開催

ESD=持続可能な開発のための教育。1995年から始まった国連のキャンペーンで、岡山地域は初年度から参加し、持続可能な地域づくりに取り組んでいる。

市では、アダプトをきっかけにいろいろな環境活動に関心を持ってほしいと思っているので、交流会を年1回必ず開いています。事例紹介やパネルセッションなどがあり、最近ではESD活動団体と一緒にやっています。更に、表彰制度があり、交流会に出したパネルを元を選んでいきます。交流会やいろいろなところにパネル展示をし、投票をしてもらい、その結果を踏まえて選んでいます。

ニュースレターの発行もしています。毎回特集を組んで、アダプトに限らず、いろいろな環境関連の話題を提供しています。

今後の課題ですが、他のアダプトと同じで、継続感や達成感、後継者の育成がどうしても課題です。新たな参加獲得のための広報もあります。アダプトにとどまらず、他の環境問題にも関心を持って行動出来る人をどうやって増やしていくかが課題だと思います。

## 今後の課題

- ・活動の達成感、参加意識の継続
- ・後継者の育成・支援
- ・ゴミの処理(特に河川等の刈った草の処理)
- ・新たな参加獲得のための広報
- ・活動成果のフィードバック、共有
- ・きっかけで参加した人の育成





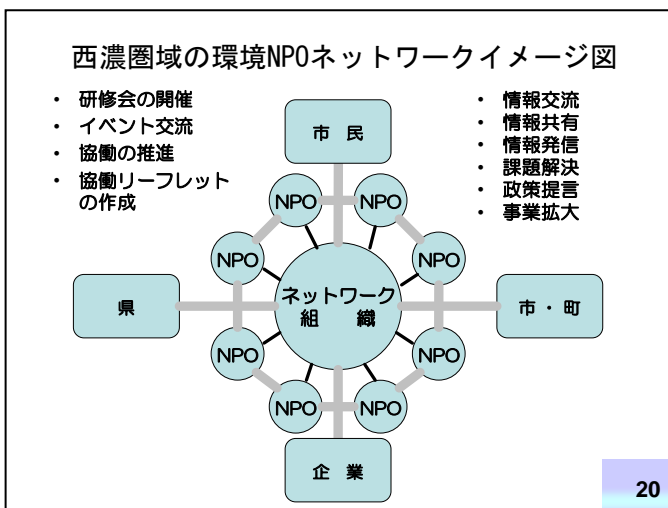
### ③ぎふ・エコライフ推進プロジェクト

岐阜県揖斐川町の活動というのは、アダプト・プログラムそのものではありませんが、アダプトの形になり得るものも含んでいます。行政・企業・NPO・住民の協働ですので、まさしくアダプト・プログラムだと思っています。

地元のいびがわミズみずエコステーションというNPOが、《人に優しく川に優しく》、《きれいなまちを次の世代へ》、《緑の地球を子どもたちへ》、という3つのスローガンを掲げて、持続可能な循環型社会の構築を目指した活動を展開しています。このNPOの前進団体が、平成5年に立ち上がった、日本のどまんなか《いびがわ》ミズみずフェスタ実行委員会という組織です。揖斐川という1級河川流域の17市町村の住民248人によって、ごみを拾いながら河川の状況を知る、水質検査をやる、成魚放流するといったウォーターラリー活動を展開しました。そのほか、北海道から沖縄までのおいしい水を集めた全国利き水大会、牛乳パックの回収、町内の川に木炭浄化システムを設置、天ぷら油を活用した天然石けんづくりを行っていました。こうした実行委員会組織を発展的に解消してNPOを設立しています。このエコステーションの活動は大きく分けて4つあります。環境の駅の管理・運営、堆肥化ステーションの運営、ネットワークの構築・協働事業、エコライフ推進プロジェクトの推進です。このNPOは揖斐川町の中心市街地、空洞化している一軒家の無償でお借りして、事務所を構えています。



活動の一つ目の柱は、環境の駅事業です。飲料缶とペットボトルの機械を置いて、缶の方はアルミとスチールを機械自身が分別しながらプレスします。ペットボトルの方は、色付きと透明を分別しながら破碎チップにしています。こういった機械を東海地方で初めて導入して、地元の商店街37店舗がラッキーチケットを発行し、焼き肉屋何でも1品無料券やコーヒーチケット割引券など、3割の確率で出るというシス



テムを構築しました。これを1号店から4号店まで作り、現在は行政に移管しています。

二つ目の柱は堆肥化ステーションです。専用バケツを2,000円で貸与して生ごみを貯めておいてもらい、それを週3日で持ってきてもらいます。2回持ってくると先ほどのラッキーチケットがもらえます。その生ごみからでき土の素を、土壌改良材として販売しています。そのほか、子どもたちに環境にかかわる絵を描いてもらい、ポスター化してごみ収集車に貼るエコパッカー事業も行なっています。資源回収は、月に1回行っています。

揖斐郡には揖斐川町・池田町・大野町の3町ありますが、そこで活動するいびNPO法人連絡協議会を平成17年に立ち上げ、現在18団体が加盟しています。その中で、県からの委託事業として、いび地域環境塾を毎月第2土曜日、岐阜県民環境の日に開催しています。

それから、平成12年から毎年、揖斐川流域のクリーン大作戦を展開しています。当初、旧揖斐川町だけで行っていましたが、合併した五つの村や池田町、大野町にも広がり、現在3,000人を超える方が参加しています。その後、平成18年に西濃環境NPOネットワークを西濃地域2市9町で立ち上げ、現在25団体が加盟しています。NPOが主体となり、行政、企業、市民と連携協働して事業展開をしています。

最後の柱は、平成19年からスタートした、ぎふ・エコライフ推進プロジェクトの推進です。当時はまだレジ袋が有料化されていなかったので、まずはレジ袋を断ることから始めようと、協力店舗でレジ袋を断ったらポイントを貯めて、100ポイント貯まったら1本の植樹を行っていました。平成19年度には2市9町、490店舗がこのプロジェクトに参加しています。平成20年4月からは、エコライフを推進し環境行動を広げようと、岐阜県内42市町村すべてがレジ袋を有料化したので、レジ袋だけではなく、マイ箸・マイバッグ、それと各団体が行う環境行動もポイント化しました。さらに、植樹だけではなく、花壇づくりやエコグッズと交換できるシステムにしています。平成20年度には795店舗に増えています。

20年度、お惣菜バイキング・マイパック持参制度の実証実験を全国で初めて行いました。フードセナートミダヤでは、お惣菜をバイキングで販売しているのですが、持ち帰り用のパックをデポジット制度にして、量り売りする仕組みです。次に来店する時にこのパックを持ってくると、お店で滅菌消毒したパックと交換してくれる実証実験を行いました。

平成20年度には、2万2,000人を超える方に環境行動に参加をいただいています。さらに平成21年10月からは、西濃地域エコライフ推進プロジェクトを、ぎふ・エコライフ推進プロジェクトに改称をしました。当初、西濃

**20年度・お惣菜バイキング・マイパック持参制度**  
**全国に先駆けた取り組み**

2009.1.20 中日新聞

2009.1.8 中日新聞

29

The image shows a collage of newspaper clippings and a photograph. The top part features the title '20年度・お惣菜バイキング・マイパック持参制度' and the subtitle '全国に先駆けた取り組み'. Below this, there are two newspaper clippings. The left one is dated '2009.1.20 中日新聞' and has a headline '総菜店来店時に持参 再利用を奨励'. The right one is dated '2009.1.8 中日新聞' and has a headline '総菜店開業 実験で実証を'. A photograph of a person in a uniform is also visible. At the bottom, it says 'H21年1月19日～2月1日実施' and '29'.



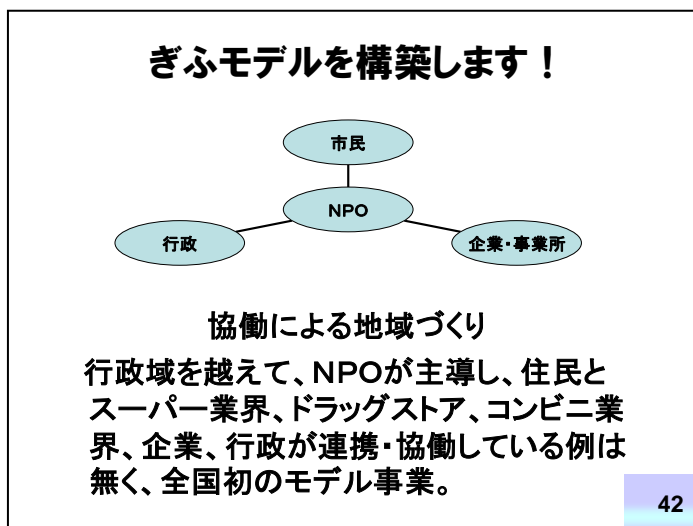
地域 2 市 9 町だけで始めましたが、岐阜地域の 5 市 3 町、中濃地域の関市まで含めて広げていこうということで改称しています。さらにフェアトレード商品取扱店、あるいはドギーバッグの使用可能店、こういったところにも入ってもらっています。平成 21 年度には、116 団体が参画をするまでに広がり、22 年 9 月現在では、851 店舗がこのプロジェクトに参加しています。

これまでキャンペーンや講演会を積極的に行い、環境大臣表彰や中部の未来創造大賞の中部経済団体賞や、日本の元気大賞の特別賞など、さまざまな表彰を受けています。新聞・テレビ・ラジオなどで多くの取り上げをいただいています。平成 21 年度には、3 万 1,241 人が環境行動に参加をしました。

平成 22 年 2 月には、お惣菜バイキング・マイパック持参制度を大垣市の丸魚フードセンターで、実際にスタートしています。パックも大小 2 サイズのほか間に間仕切り入パックを導入し、使いやすいように工夫しました。また、平成 22 年 2 月からは、フェアトレード商品やドギーバッグ使用可能店も対象にしています。これまでの 3 年間で、3,608 本の植樹をしました。これらは協働によって事業展開がなされています。

我々の活動は、NPO が主導することによって、行政域を超えることができた全国初のモデル事業となっています。平成 22 年度は、さらにエリアを広げていきたいと思っています。今後は、マイパック持参制度の確立や、地産地消視野に入れた《アースデイ・いびがわ》を開催していきます。

今後も、子どもたちが安心して住めるように続けていきたいと思っています。



#### ④企業参加型アダプト活動

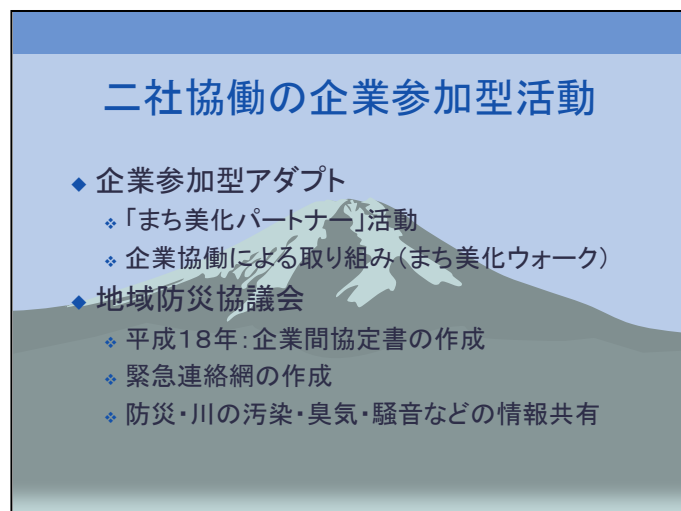
永田（磐田化学工業） 皆さんご存知かと思いますが、磐田といえばナビスコカップで久しぶりのタイトルを取ったジュビロ磐田のホームタウンです。私たち磐田化学工業と日本アルコール産業は、市のほぼ真ん中にあります。工場周辺には祝川というシラサギが飛来する川があり、工場の最終排水先として共有しています。ただ、この周囲は人の目が行き届かず、沿道には心ない人たちの不法投棄が後を絶ちませんでした。そこで、祝川を共有する二つの事業所は、ごみを拾い続け、清掃を行って来ました。

磐田化学工業は半世紀前からこの地でクエン酸を作り、日本で初めてイタコン酸を製造した発酵メーカーです。発酵による食品・医薬・化粧品の原料、また中間体を製造しています。キノコ菌糸体によるアガリクス、メシマコブ、黒糖入りクエン酸等の自社製品の製造販売もしています。まち美化パートナーには平成 19 年 5 月、磐田市道路河川課の紹介で加入しました。



羽田（日本アルコール産業） 私どもの工場は、戦前の昭和 14 年に国営の中泉酒精工場として、地元で取れたサツマイモを原料としてアルコールの製造を始めました。平成 18 年から現在の社名となって操業しています。濃度・度数が 95 度及び 99 度のエチルアルコールを製造しており、食品・医薬品・化粧品・香料・化学品と幅広く使われています。もちろん水で薄めれば飲むことも出来ます。

平成 20 年 3 月に磐田化学工業の永田さんからまち美化パートナー参加のお誘いがありました。私どもは以前から年に 2～3 回程度、工場周辺のごみ拾いを行っていましたが、磐田化学工業さん始め近隣の企業も参加しているとお聞きして、まち美化パートナーに加入しました。現在、毎週水曜日に行っている工場の清掃に併



せ、月 1 回道路清掃を行っています。看板も磐田市に設置してもらいました。ポイ捨ての量は確実に減ってきていると思うので、私たちのやっているこの活動は、お役に立っているのかなと思っています。

月に 1 回の清掃時間は、大体 30 分から 1 時間ほどです。工場周辺の道路に

はいろいろなごみが落ちていて、たばこのポイ捨てが結構ありますが、10月に値上げされたので、少しは減っていくのではないかなと期待しています。

今年4月14日、歩道の雑草が多くなってきたことから、ごみの清掃を兼ねて、周辺道路の除草を道路河川課の皆さんと協働で行いました。当初、軽トラック1台で回収出来ると思っていましたが、思いの外ごみが多く、ごみ収集車を用意してもらうほどの量になりました。清掃後の道路はすっきりと綺麗になり、気持ちの良いものでした。清掃した私たちもそうですが、この道を利用される方、また近隣住民の方も同じような気持ちだと思いますので、今後も定期的に行っていきたいと思っています。

永田（磐田化学工業） 磐田化学工業も月に1度道路・河川周辺の清掃を、全社で行っています。また、毎週月曜日に、工場周辺のパトロールをしながらのごみ拾いも行っています。

道路河川課との協働作業で、祝川土手の背丈ほどになった草を刈って、自転車とか歩行者が通れるような道を作りました。地元の人には大変好評で喜んでいただいています。

私たち2社は、何ら資本関係があるわけではなく、仕事のつながりも全くありません。ただ、隣接した会社としておのおのが携わっています。もし、地域住民から、音やにおいの苦情があった時、自分たちの会社だけが良ければいいということでは済まないと思います。それは何の解決策にもならないからです。私たちは情報の共有化を図るべく、緊急連絡網を作って、お互いがかかわり合っている関係になっています。また、地域防災協議会を立ち上げ、事故や災害の協力体制を確立しています。

その延長として、各々が取り組んでいる環境美化活動を「まち美化パートナー」として目的意識を統一するに至っています。

各々の環境美化活動を何かの形に出来ないか！ その思いを現実を実現する事が出来ました。

羽田（日本アルコール産業） 5月14日に、ラジオの生放送で活動が紹介されました。i（あい）ぽーと発！磐田情報局という毎週金曜日11時15分からの番組です。ここではまち美化活動とは何かの説明と、私たちの活動について紹介しました。どれだけの人に届いたかは分かりませんが、磐田市にとどまらず静岡県内に広くまち美化活動をお伝え出来たのは大変良かったと思っています。

また、10月4日には磐田化学工業と磐田市と、2企業1行政の協働により、ごみを拾いながら会社周辺の町内を歩く、まち美化ウォークラリーを行いました。前日の土日に町内の秋祭りが行われ、ごみがたくさん落ちているだろうから是非やろうと意見が一致し、磐田市に声掛けをして実現しました。参加者は総勢35名で、まず安全第一でやろう、そして楽しんでやろうということで行いました。ごみは軽トラック1台分になり、後日、地元の中日新聞地域版で紹介されました。このまち美化ウォークラリーは、今後も町内のお祭りの後に毎年続けて行う予定です。

永田（磐田化学工業） 行政から企業、自治会、あるいは市民団体、学校との協働、その中で企業と企業の協働という新しい形、自治会などで言う「お隣さん」関係が希薄になっている現代社会の中で隣接する会社同士も同じ「お隣さん」じゃないかなと思います。お互いが使っている道

路や川は、お互いが協働で「美化」を進める事はあたりまえの成り行きだと思います。

「まち美化パートナー」という看板が1社から2社に増え、この場所は管理された場所である事が周知され何年も頭を抱えていた不法投棄やポイ捨てが激減しました。

私たちは何も特別な活動をしているわけではありません。強いて言えば、同じ志の仲間、ただそれだけの事です。これからも限られた時間の中で活動を続けていきますが、10年、20年活動を続けていく事、継続する事こそ一番難しい事かもしれません。

今やれることをやる、身の丈に合った活動を続ける。身の丈というのは頼りない言葉に聞こえるかもしれませんが、身の丈は歳月と共に成長していくものだと私は思います。

2010年度の磐田市のまち美化人口は、市内人口の10%に達しています。微力ながら私たちも、その中の1人です。やり続けることで、私たちの大好きな「磐田」がもっともっと好きになり、その事は私たちの子どもたちに受け継がれていきます。

ごみを拾うことが出来る人は、ポイ捨てをしないですね。私たちの活動は、すべての人にその思いがいきわたるまで終わりはないと思っています。

